

AIを活用した教育で胆力は磨けるか 目標は「効率向上」から「教育の本質」へ

オンライン学習サービス「スタディサプリ」を提供するリクルートマーケティングパートナーズ社長の山口文洋氏と、共同研究を進める松尾豊・東京大学特任准教授が、AI時代の教育をテーマに議論した。(聞き手は多田 和希、執筆は橋本 史郎)

人 工知能 (AI) がますます活用されていく中で、どういう人材が求められて、そのためにどういう教育が必要なのか。さらに、AIを教育にどう活用すればよいか。

山口 いわゆる義務教育から始まる英数国社理というものを100年、200年前に体系立ててきて、これが基礎知識として役立つということで、これまで学校というアナログな場で一斉授業で勉強してきた。

しかしこれからは、知識を得て吐き出すだけではだめで、知識と知識を組み合わせる訓練が必要だと思う。そこから新しい仕組みや思想が生まれるだろう。そのために、基礎知識教育の効率をどれだけ非連続に上げていくかが重要になる。ビッグデータやAIを活用し、最適な学習環境を整えることによってそれが可能になると考えている。

テクノロジーが教育に果たせる役割はもっと幅広いのではないかという思いもある。今のビッグデータ時代だからこそ、基礎知識教育を再定義できるのではないかとも思う。しかし、その話になると難易度が途端に上がる。

時代を超えて通用する能力を高める

松尾 学ぶものが決まっていて、その中で学ぶ効率を最大化するような

ことは(テクノロジーで)十分できるようになってきた。そのうえで、そもそも何を学ぶべきなのかということをもう一度考えたほうがいい。

今の受験科目は、人間の様々な能力を、いくつかまとめて評価しているにすぎない。社会で活躍することがゴールだとすると、そのために必要な能力は、その人の持っている性質や能力をつなぎあわせればいいのだから、何教科と絞る必要はないはず。能力の定義の仕方、知識やスキルの定義の仕方は、今の受験より良いものがあるはずだと思う。

その次の段階として、そもそも何を学ぶべきなのかを自分で見つけたり、判断したり、たくましく生きていったりというような能力があるはずで、それは効率的に学ぶということからは生まれてこないのかもしれない。AIの技術が進めば進むほど、必要とされる能力は変わっていくので、時代を超えても通用する能力をどう高めるのか、それが教育し得るのかはすごく大事だと思う。

——先日取材したベンチャー企業では、学習意欲が高く優秀な人材が多く集まって効率的に仕事をこなしていた。世界最先端のテクノロジーを修得して、実際のビジネスに実装できる力がある。ベンチャーというリスクがある中で、単に頭がいいだ

けでなく、産業を変革したいという大きな夢を持っているなど、生きる力を感じた。

松尾 そういう人材を育成できるかどうかは難しい問いだ。好奇心を持たせて学習意欲を高めるには、学習するとうまくいったという体験を仕組んでいくことになるのかもしれない。しかし、仕組まれたことによって本当に学習意欲が身につくのかという問題も出てくるだろう。本当はいろんな失敗をしながら、どうしたらうまく学習できるのかも含めて、学習しなければならないと思う。

ジャングルとサファリパークではどちらが生命力を高められるかという違いに似ている。時代の変化が激しくなればなるほど、根源的な力のほうが重要になってくるとは思う。

山口 ある外資系人事コンサルティング会社は、グローバルリーダーに必要な要素を4つ挙げる。1つ目は、何ごとにも夢中になってしまう好奇心。2つ目は、好きになったものを論理的にまとめられる洞察力。3つ目は、体系的に整理したものを多くの人に伝えられる共感力。そして4つ目が、どんな困難に直面しても仲間をしっかりと率いていく胆力だ。

好奇心や洞察力はテクノロジーを駆使することによって育成できるのかもしれない。しかし、共感力や胆力は成功体験や失敗体験を積み重ね